

発達 22 (359~366)

座長 橋口英俊・堀端孝治

- 359 教科書と人格形成に関する基礎的研究(II)近代教科書の内容分析—生命尊重と達成動機を中心に—その1
東京家政大学 橋口 英俊
- 360 —その2
“ 鮎川 成子
- 361 —その3
“ 三角 同
- 362 —その4
“ 今井 啓子
- 363 児童の道徳的判断に関する一研究
名古屋大学 二宮 克美
- 364 道徳的判断の発達に影響する社会的経験の検討
Role Taking Opportunity との関連
東京大学 山岸 明子
- 365 児童の心身発達に関する追跡研究(11) —学童のテレビ視聴時間と人格発達
愛知教育大学 堀端 孝治
- 366 社会的分配操作の発達と認知的および環境的要因との関係
慶応義塾大学 内藤 俊史

359~362は昨年にひき続いての発表で、今回は明治の学制発布以降の修身および理科に焦点をあわせ、特に全国連教科書を生命尊重、達成動機、内容別に分析検討した結果が報告された。無藤から評定の信頼性およびMcClellandらの研究との関連について質問が出され、それに対し前者については抄録に示した基準にしたがって共同研究者全員が一致することを原則としたが、厳密な意味での信頼性の検討を行っていないこと、後者に関しては達成動機の考え方や基準の設定にかなり参考にした旨述べられた。次に高橋(愛知教育大)から生命尊重の評定に際し、自他の問題をどう処理したか、また修身の内容分類カテゴリーを設定してはどうかと質問があった。前者については自他の生命をともに尊重することを原則としたが、片方だけの場合も評価の対象とし、その際区別はしなかった、また生命尊重ということ自体が究極においては自由と平和を指向したものであるが今後十分検討してみたいと述べられた。高橋から今後の問題として、現在の指導要領、指導書や副読本についても検討してほしい旨要望

があった。さらに本田(文教大)から、表題にみる人格形成に関してはどうなっているのか、最終目的は何かとの質問があった。それに対してこれらの教科書を学んだ人々がその後どのような価値観のもとにどう生きたかを自叙伝、伝記、作品やアンケートなどの分析を通して検討する予定で、本報告はそのための条件分析に相当し、最終的には教育はいかにあるべきかを具体的に提示することにあると述べられた。

363では、実験的に意図と結果の情報提示の順序を変え、それが児童の道徳的判断にどう影響するかを意図の認知レベルから検討している。藤原(都立大)から何故キャンディ配分という実験手続を導入したのかと質問があり、発表者より道徳的判断の指標になると考えたからだという解答があった。ついで無藤からオペラント水準を測らなくてもよいと考えられないか、また再テスト効果はどうであったか質問があった。それに対してオペラント水準は被験者のベースラインの違いがあるので、検討してみたい。再テスト効果は6回行ったが効果はなかった旨述べられた。

364では、大学生を対象として日常場面でRTOの高い項目がその道徳的判断の発達水準に関与しているかどうかを検討した結果一応仮説を支持させる方向を示したと報告された。二宮(名大)から表1の段階5は最高得点であったか、また段階5と6を何故まとめたのか努力してでも段階6を分けるべきではないかとの意見が述べられた。それに対して、段階5の最高点は4.8であったこと、また後者についてはRestの原版を訳して用いたがうまく区別できなかった、今後の課題としていきたいと述べられた。

365は、学童期の4年間を通して長時間視聴児と短時間視聴児との心身の発達、人格特徴を比べると前者には発達の遅れや問題点が多くみられたとの報告がなされた。無藤から極端に少ないサンプルでテレビ視聴時間の効果をみるのは不相当ではないかと質問が出され、それに対して長期間にわたり視聴時間を調べたものでたとえ少数でもその効果が人格発達に影響するものと思うと述べられた。

366は、幼児の社会的認知操作を規定する認知水準と環境要因が異なる形で関連していることを明らかにした。無藤からMspanを認知度数としているがI.Q.ではいけないのかと質問があり、それができなかった経過が述べられた。(橋口英俊・堀端孝治)